

マガジン執筆者訪問記（２）ねこから目線。

きっかけ

2月初旬、マガジン執筆者の小池英梨子さんの「ねこから目線。」の Facebook の記事が目にとまりました。トラバサミに前足をはさまれた猫が近所にいる、という連絡を受けて保護に向かったことや、その後の対応・経過が記されていました。その熱意と、本当に地道で根気強い取り組みの一端に感じ入り、記事の最後に“寄付は受け付けていませんが、こんなのはあります”と Amazon のほしいもののリストのリンクがあり、猫を保護する際に使う資材や餌などがリストに掲載されていたので、ストック数が少なそうなものを見繕ってポチっとしておきました。実は Amazon に「欲しいもののリスト」という機能があること自体、これまでほとんど認識しておらず、「これをポチっとすれば、なんか知らないけど小池さんのところに届くんだよね？」という感じで、誤って自分の家に届くことがないように、おじいちゃんのような手つきで注文をしました。

① ねこから目線。



対人援助学マガジン 27 号「そうだ、猫に聞いてみよう」より

それから 2 週間ほどして、小池さんから連絡があり、「欲しいもののリストは、誰が送ったのが相手にわかるシステムになっているんだ！」と、初めて知りました（笑）。ちょうどよい機会かもしれないと思い、“マガジン執筆者訪問記というのを始めていて、良ければ小池さんのところにも寄せてほしいと思っている”と伝えてみました。

返信があるまで、“素人が、物見遊山で！”と思われたりしないかなあとドキドキしていましたが、数分もしないうちに「楽しそう！一緒に捕獲やりましょー！」と返信がきて、

一安心。第2回目の訪問記が実現することとなりました。

訪問日は3月。仕事は直近の1～2週で入る場合が多いとのことで、当日のスケジュールはこの時点では未定でした。

ねこから目線。

「ねこから目線。」のことは、詳しくは小池さんの連載（そうだ、ねこに聞いてみよう）を読んでいただくのが一番よいのですが、訪問記から読んでくださった方のために簡単にご紹介します。

	人ねこケア（NPO）	ねこから目線。（個人事業）
利用料	無料	有料
対象	福祉支援対象者の飼い猫	ノラ猫と保護猫
対象範囲	とても狭い	広い
活動資金の出どころ	自腹+ご寄付	お客さん
安定具合	不安定	安定
位置づけ	ライフワーク	ライスワーク兼ライフワーク
ひと月当たりの稼働日	1～3日程度	25～31日程度
対応時間	仕事の合間	基本24時間対応

「ねこから目線。」は小池さんが行う個人事業の名称で、事業内容は「猫専門のお手伝いやさん」です。いわゆる便利屋さんの単価を参考にしたとのことで、有料で、猫に関するさまざまな依頼を引き受けておられます。

もう一つ、小池さんが手がけておられるのが、「人ねこケア」（人もねこも一緒に支援プロジェクト）。こちらはNPOとして取り組んでおられる事業で、表にもある通り「ライフワーク」として非営利（というか、持ち出し）でやっておられるとのことです。

「ねこから目線。」の開業は2019年からですが、それ以前も含めた小池さんの略歴は以下の通り。

小池英梨子（こいけ えりこ）さん

2015年 立命館大学大学院応用人間科学研究科修了

2015年 公益財団法人どうぶつ基金に所属

（マガジン21号から連載開始。23号で一時休止）

2017年 「ねこから目線。」としてフリーで活動

（マガジン27号から連載再開。のらねこ生活を自称）

2017年 立命館大学大学院応用人間科学研究科実験・実習相談室勤務

（マガジン29号「のらねこ、飼いねこになる」）

2017年 NPO法人FLC安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク」の中に、「人もねこも一緒に支援プロジェクト」が発足。

2018年 個人事業「ねこから目線。」（猫専門のお手伝いやさん）開業

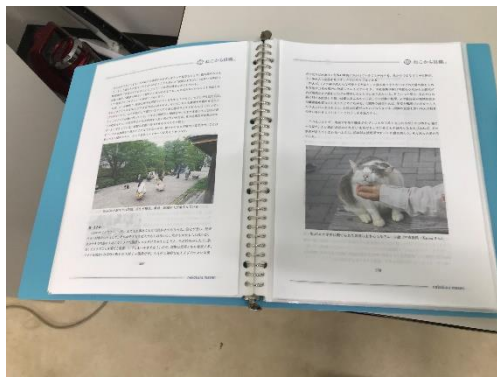


訪問にむけて

「ねこから目線。」の活動は、2017 年の対人援助学会の研究会での小池さんの講義を聴講して以来、とても興味深く、ネットの記事やニュースの特集なども観てきました。いつかは訪問したいと思っていたのが、思いがけず早期に実現することになり、ちょっと興奮しました。

しかししかし、少し落ち着こう。前回の訪問記は、事後的に訪問記にすることを思いついたため、いささか準備が不足している面がありました。つまり、陶芸工房の見野さんのお話はめちゃくちゃ面白いのに、訪問者の力が足りていないので、原稿にしたときに、当日ライブで話してもらった時の面白さに行きついていないのです。学んだことは次に活かす。今回は、入念に準備をしなくては。

まずは、マガジンの『そうだ、猫に聞いてみよう』のバックナンバーをすべて見返してみました。ほとんど読んでいるつもりだったのですが、1/3 くらいは初見の原稿がありました。また、過去に読んだ原稿でも、改めて面白く、学ぶことが多いと感じました。さまざまな人や機関とつながり、資料や情報を有効に利用し地道に働きかけていく活動の緻密さもさることながら、現状の分析や関係者の思考・立場の理解、啓発を含めた社会への働きかけまで、“猫の殺処分ゼロ”に向けた活動の幅広さにただただ感嘆します。内容と重ねた回数の厚みを実感できるように、印刷してファイルにしておきました。



訪問後、小池さんから頂いた「ねこから目線。」ステッカーを貼りました

小池さんの連載を読み返すと、“そういえば、小さい頃は動物好きな子どもだったよなあ”と、久しぶりに自分の幼少期を思い出したりもしました。我が家は男 3 人兄弟。兄と弟は鉄道好きで、家には時刻表や鉄道写真の本がいっぱいでしたが、私だけ生き物に関心があり、昆虫図鑑や動物の生態に関する本などを好んでいました。最初を買ってもらった絵本は「みにくいアヒルの子」。とにかく動物ものがよかったんでしょう。“犬を飼いたい”と思

っていた時期もあったのですが、最初は団地暮らしで無理で、戸建てに引っ越した後も「うちにはもう 3 匹（の悪ガキ）いるでしょ」と言われ、返す言葉もありませんでした。以来、動物の飼育を経験することはなく今に至ります。

そういえば、一度だけ道路に堕ちているコウモリを見つけて、家族に内緒で保護したことがありました。コウモリが何を食べるかも知らず、牛乳を持ってきて皿に入れると、ぺろぺろと飲み始めました。数日後、コウモリを手のにのせ、牛乳をあげていたところ、指先にチクッと痛みが走りました。出血はしていませんが、噛まれました。痛みで驚いて手を動かすと、コウモリは飛び上がり、窓から空に消えていきました。無事（？）に保護は完了したものの、“コウモリに噛まれるって、大丈夫なの？”と、自分が吸血鬼になるかも、と子ども心に恐れながらその後数日を過ごすことになりました。

猫にとってのメリット

話を戻します。小池さんの連載を再読して、活動の内容や理念はある程度頭に入っただけなの、そもそも猫をめぐる社会の現状について、自分が何も知らないことに気づきました。

Amazon で「ねこ」をキーワードの本を検索すると...出るわ出るわで、数えきれないほどです。『飼い猫の秘密』『保護猫カフェ』など猫の飼育や保護に関するものから、『ヤマネコはいつイエネコになったか』という文化人類学絡みのもの、『ニャンとかなる』という自己啓発本（？）まで本当に幅広い。少し思案して、6冊ほど図書館で借り、うち3冊ほどを熟読、残りは気になったところだけさっと目を通しておきました。

知らなかったことがたくさんあり、面白く読みましたが、とくに印象に残った記述が、「猫は都合がよいから、人と一緒にいる」という話。なんでも、猫は単独狩猟者、つまりハンターであるそうです。犬は、オオカミであった頃から、集団で狩りをします。その際、群れのボスに従って狩りを行い、自分たちより大きな獲物をしとめてそれを分け合います。そのため、犬のような社会を持つ動物は“ボス”に従うという習性があり、飼い犬の場合はそれが飼い主になるそうです。つまり、犬は“ボスについていく”という関係性のもと、人と生活を共にしていることになります。一方で、猫はネズミなど自分より小さな獲物を単独で仕留めます。つまり、ボスについていくという習性はありません。では、猫はなぜ人と一緒にいるか。それは“都合がよいから”だそうです。単純に言えば“コイツの側にいると食べ物には困らないから一緒にいてやるか”という感じだとか。

本当かどうか私には判断が付きませんが、人懐っこいけれど、一方で気ままで、気位の高さを感じたりもする猫の振舞いを見ていると、なるほどそうかとも思われます。そして何より、このことが「ねこから目線。」が仕事を引き受ける基準（何らかの形で猫にメリットがあること）ともつながるような気がして、勝手に面白く思いました。「それで、私にはどんなメリットがあるの？」は猫が人に尋ねてみたいと思っている点かもしれませんから。

訪問日

訪問日直前に小池さんと連絡を取り、当日は京都市内の駅前で待ち合わせることにになりました。小池さんとお会いするのは、2019年の年末の「対人援助学マガジン 執筆者と読者の集い」以来です（マガジン 40号参照）。午前10時過ぎ、諸事情で少し遅れて到着された小池さんに拾って頂き、車で1件目の家庭訪問に向かいます。

訪問日のスケジュールは次の通りです。この日はNPOの「猫も人も一緒に支援プロジェクト」の仕事と、個人事業の「猫から目線。」の仕事がミックスされているということで、小池さんの活動を広く目の当たりにできる！と幸運に感謝しました。実は小池さんがそのように采配してくださったのかもしれない。

ちなみに、小池さんは朝4時から1件現場に出て、いったん帰宅し仮眠をとってから来られたとのことでした。すごすぎる…。

午前①：家庭訪問（多頭飼育のご家庭の経過伺い）@京都（NPO）
午前②：手術のための猫の預かり@京都 ⇒ 病院に@大阪（個人事業）
午後①：家庭訪問（多頭飼育のご家庭の経過伺い）@大阪（NPO）
午後②：家庭訪問（多頭飼育のご家庭の経過伺い）@大阪（NPO）
午後③：保護と不妊手術のための捕獲@兵庫（個人事業）

家庭訪問@京都

最初は、多頭飼育のお宅への家庭訪問から。マガジン 30号、31号でも紹介されているケースのお宅です。このケースが、NPO設立のきっかけにもなったということで、活動の原点とも言える場所に行けることになり、内心浮足立ちました。

到着したのは、よくある団地が立ち並ぶ一帯。その中の一室で、77頭もの猫が多頭飼育崩壊の状態にあったということです。どこにでもある風景の中で、支援が得られないまま生活していた猫と家族がおられたのだということが、私の中で重みを持って伝わってきました。NPOに届いた支援フードなどを手に訪ねると、ご家族と猫たちが出迎えてくれました。小池さんはバインダーを片手に、猫たちの健康状態や、頭数（新しく入ったり、亡くなったりした猫がいないか）、ご家族が気になっておられることなどを手早く、丁寧に聞き取っていかれます。

飼育されている猫は30頭超。前回の訪問から増減はなく、健康状態に問題を抱えた猫もいないようです。不妊手術が済んだ猫たちなので、家の外からの新たに入ってくるものが

なければ、頭数は緩やかに減少していくわけです。『この子たちは私らが最後までみてやらんといかんからねえ』とつぶやくお母さん。その過程に伴走する人がいることの意味を強く感じました。

ご家族から厚く信頼されていることが伝わってくる家庭訪問の現場。小池さんの横に立っていると誰だかは知らないけれど、猫に詳しいと思われるようです（当然です）。お父さんが「このブルーポイントの猫は...」、「ロシアンブルーのおじいちゃんがいて...」と色々話してくれるのですが、どっこい相手はズブの素人です。ブルーポイントというのがどの猫のことかもわからずキョロキョロする私を見て、察して下さった様子で小池さんとお話に戻っていかれました。すみません...。

一方の猫たちは、新参者の私にも興味を示して、1頭また1頭と近づいてきてくれます。“か、かわいい...”

1頭が近づくと周りも安心するのか、次々と近づいてきて、気づけば私の足に体をすりすりしている子もいます。

“これなら触っても大丈夫かな...”

と思い、予習してきた本のおぼろな知識を呼び起こしながら、背中をそっとなでてみました。毛にはつやがあり、サラリとした手触りで、素人の私にも健康的な状態であるように感じられました。この猫たちの人に対する信頼感は間違いなく飼い主さんとの間で築かれたもので、愛されて暮らしてきた子たちなんだなあとしみじみ感じます。

そんな中でも一番の勢いだったのがO君。足元の猫たちをうっかり踏まないように（多分要らぬ心配だったでしょう）と棒立ちになる私を、スイスイと登って肩の上までやってきました。『こいつが一番の甘えたや！』とお父さん。『連れて帰ってもらおうか？』と愛情たっぷりの冗談も飛び交う場で、ひとときほっこりとさせて頂きました。飼い主ご家族の猫たちに対する愛情を深く感じながら、一方でこれほど愛情深い飼育者がひとつ掛け違えると飼育崩壊の状態に陥るケースもあるのだということも実感しました。だからこそ、そのような時には家の外から、適切な支援が必要な分だけ成される必要があるのだと思いました。



のらねこさんの手術室

家庭訪問を終え、手術のために猫のお迎えに行ってから、次は大阪、池田市にある「のらねこさんの手術室」に向かいます。これまで小池さんの SNS で度々見ていた動物病院。その名の通り、のらねこの不妊去勢手術専門の動物病院です。のらねこを保護したいと思っているけれど捕獲できない方のために、自院で手術する猫については、捕獲のお手伝いを出張して行っておられたりもします。



元うどん屋さんで、その名残もある「のらねこさんの手術室」。駐車場の P のマークがかわいい。

のらねこさんの手術室について、ニュースで取り上げられた動画があります。

リンク ⇒ [動画](#)

とてもわかりやすくまとめられているので、ぜひご覧ください。

支えて・支えられて

今回の訪問で初めて理解したのですが、「ねこから目線。」の事務所はこの「のらねこさんの手術室」の 2 階になっているとのこと。私が Amazon から送った支援物資もここに到着していたそうです。

“どういう経緯でそんな風になったのか？”

疑問に思ったのでお聞きしてみました。要約すると、小池さんが「時給 100 円から好きな設定でいいので」というルールでお手伝いを始めたのがきっかけ。「のらねこさんの手術室」では受けられない依頼（例えば、自院での手術にはならないねこの捕獲のお手伝いなど）について、小池さんが個人的に引き受けるようになったとのこと（後からわかったのですが、マガジン 36 号にこの経緯が書いてありました）。これによって、「のらねこさんの手術室」は従来対応できない依頼も間接的にカバーできることになり、「ねこから

目線。」も動物病院を窓口にした仕事も請け負うことができるようになります。まさに Win-Win の関係です。

ねこを助けることが、ねこを支援したい人を助けることにもなり、それが小池さん自身を助けることにもつながる…。支援の輪が循環し「支えて―支えられて」の関係性のもと、横並びの関係性の中でとてもうまく連携が機能していると感じられました。

いつでも・どこでも

そんな「ねこから目線。」ですが、小池さんはほぼ事務所（動物病院の2階）にはいないので、仕事の依頼は携帯電話にかかってくる。初めて受けた電話で、まずは相談内容を聞き、受託できる依頼であれば概算の見積もりまでその場でこなしていけます。時間当たりの単価だけならともかく、交通費は移動距離によっても異なりますし、「ねこから目線。」への依頼以外で必要になる費用（治療費）もあるのですが、それも含めてその場で計算して、おおよその総額を依頼主の方にお伝えしておられました。また、依頼主さんの居住地に応じて、関西圏で TNR 対応をしてくれる動物病院に関する情報提供などもされていて、すべての情報が頭に整理して格納されていることがうかがえました。本当に、プロの仕事です。

ねこ屋さん（家庭訪問@大阪）

午後からは大阪府下の多頭飼育の家庭訪問。同じ大阪府下とは言え、違う市であれば当然それなりの移動距離もあり、時間もかかります。帰宅後、GoogleMap で私が同行した部分のおおよその走行距離を概算してみましたが、それでも 200km はゆうに超えていそうです。

“こういう移動距離になるのは、よくありますか？”

と恐る恐る聞いてみましたが、この日は標準的な移動距離であったそうです。

2 件目の家庭訪問は市営住宅に。本当はペット飼育不可の物件らしく、支援物資もいかにもペットフードと見える包装ではないものを選びます。“ルール違反を助けるのか！”という無理解な声も飛んでくるかもしれませんが、そんなことを言っても、今は状況の改善に向かおうとしている飼い主さんの負担感を無為に増やす結果にしかありません。現実的に、しかし本当に細やかに気遣いながら支援がなされていると感じます。

2 件目の家庭訪問でも、猫たちの頭数や健康状態について、手早く聞き取りを行っています。これまでの経過から体調に不安がある猫がいて、その記録も小池さんの手元にあります。今の状況を聞き取ると、大きく悪化はしていないようですが、楽観できるわけでもなさそうです。検査や治療には費用がかかるため、それをどう捻出するか、費用をどう抑えるか…。下手をすると 10 万円を超えてしまう可能性もあり、安易に治療を勧めるだけ

では事態は解決できませんが、放っておくことのリスクもあります。早めの対応を約束して、いったん持ち帰りとなりました。このあたりのやりとりも、本当にシビアなものがありました。飼主さんを不安にさせることもなく、的確に情報を集め、放置もしない、ということがごく自然に行われていることに驚きました。

「今日はねこ屋さんが来るからって言って、玄関は片づけといたんです」

小池さんの家庭訪問に向けて、ご家族も出迎えの準備をしておられること、なにより「ねこ屋さん」ととても親しみを呼称されていたことに、「人ねこケア」がとても適切に機能していることが表れているように思いました。

その後、もう 1 件の家庭訪問に向かいます。同じく多頭飼育崩壊状態であったところから、市のケースワーカーさんの働きで、全頭一斉 TNR と家の片づけ・整理を行い、その後も定期的に訪問を続けておられるケースでした。小池さんは、このケースについて

『ケースワーカーさんの力が大きかった』

とおっしゃっていました。確かに、小池さんに連絡を取り、家の片づけボランティアを含めて采配されたのはケースワーカーさんで、とても力のある方だと思いました。一方で、このケースは「ねこ」という切り口なしに解決したのか？という疑問も浮かびました。例えば、“近所から悪臭がすると苦情が出ているから片付けてくれ”とか“できないなら行政代執行をする”というような話をしていたとしたら、この状況は改善したでしょうか。答えはおそらくノーだと思います。3 件の家庭訪問を通して強く感じたのは、いずれのケースでもご家族はまぎれもなく「飼主」であったということです。確かに、繁殖管理ができず一時適切な飼育ができなくなっていたことは事実です。しかし、だからといって飼主としての資質や責任感のすべてが失われたわけでもないのです。TNR と、必要な分だけの支援によって、飼主としての力が発揮される環境が整えられたことで、目の前の猫たちに最も深く愛情をそそぐ「飼主」としての力が、適切に発揮されていました。

このケースでも、おそらく飼育崩壊状態にある猫たちのことは、飼主さんは何とかしたいと願っていたのだと思います。ただ、助けを求めた結果、殺処分されるようなことは絶対に避けたかったと思いますし、それが助けを求めることを阻害していたかもしれません。全頭保護をして TNR を行うことが約束され、その後の生活・飼育環境を整えるための家の片づけ・整理であったからこそ、この支援を受け入れることができたのではないかと思うのです。まさに「人もねこも一緒に支援プロジェクト」の本領が発揮されたケースなんじゃないかな、と思いました。

猫の「保護」の限界 虐待対応との共通項

移動中の車内で、いくつか質問してみたいと思っていたことを小池さんに聞いてみました。訪問までに何冊か本を読んで、その中には猫の保護に関するものもあったのですが、

猫を保護して里親につなぐ活動を広げること（例えば、保護猫カフェを開き、猫を保護するキャパを広げ、保護費用を賄い、里親にマッチングしやすくする）に注力しており、飼育崩壊のケースについて、TNRをした後で元の飼育環境に戻すという取り組みはほとんど見られないように思いました。

理由について、小池さんは「一度関わった子の支援は最後まで自分の手で救ってあげたい」という思いからではないかとおっしゃっていました。この思いは小池さん自身にもあったことで、猫が好きであるからこそ湧いてくる感情であるのだとも思いました。劣悪な飼育環境から猫を救い出した時、猫好きであるからこそ、猫をケアしたい気持ちが全面に出て、その反動として、飼い主に対する配慮や意識が希薄になる（下手をすると“ひどい飼い主！”と怒りを覚えている）という場合もありそうです。一方で、「保護ありき」の発想は、2つの限界を抱えているようにも見えます。ひとつは保護のキャパがすぐに埋まってしまうこと。そしてもう一つは、保護が本当に猫の幸せにつながっているか？という点です。小池さんから、『ニュースになったけど知っていますか？』と京都府八幡市での事件について聞かれました。私自身の居住地の近所なのに、まったく知りませんでした。以下のような事件です。

動物愛護ボランティアとして引き取った犬や猫を劣悪な環境で飼育し、餓死させるなどしたとして、京都府警生活保安課と八幡署は19日、動物愛護法違反（殺傷、虐待）の疑いで、パートの女（54）＝八幡市＝を逮捕した。女の自宅では犬猫の死骸が計52匹見つかっており、府警は犬や猫が増えすぎて世話できなくなる「多頭飼育崩壊」を起こしたとみて調べる。

八幡署などによると、女は約25年にわたって行政の殺処分を免れるなどした犬猫を預かるボランティア活動が続いていた。病気や高齢で引き取り手のないケースでも多く受け入れ、関係者の間で「神様」と呼ばれていたという。

逮捕容疑は1～6月、八幡市にある一戸建ての自宅で、餌や水を与えず猫1匹を餓死させ、動物の排せつ物や死骸を放置した室内で犬25匹と猫4匹を飼育し、虐待した疑い。女は「汚物だらけの場所で飼っていたが、餌と水はやっていた」と容疑を一部否認しているという。

神戸市の動物愛護団体によると、女に預けた犬猫の行方が分からなくなるケースが続き、団体関係者が今年6月3日、女の自宅を訪れた。室内には動物の排せつ物やごみが高さ1.5メートルほど積み上がり、ミイラ化した死骸もあった。団体の通報を受けて府警が家宅捜索し、約16トンのごみを撤去したという。

府山城北保健所によると、昨年3月以降、近隣住民から「悪臭がする」「犬の鳴き声がする」と苦情が寄せられていたという。

引き取った犬と猫を餓死さす「神様」と呼ばれた愛護ボランティアを容疑で逮捕（2020年11月19日 京都新聞）

猫を保護するには相応の環境と、相当の労力が必要になります。今でも年間数万頭の殺処分が行われている現状から考えれば、猫を救いたいという思いだけで保護を続けていけば、保護のキャパシティはすぐに埋まってしまうことは明らかです。また、とにかく保護の受け入れ先さえ見つければ、「いつ事故に遭うかわからない野良よりマシ」「飼育崩壊していた飼い主宅よりマシ」という発想にもなり得ます。そういう意味では、この記事の猫ボランティアさんは、保護活動が続ける人にとって、とてもありがたい人であったと思われます。保護をいくらでも受け入れてくれる、善意の人であったわけですから。

対人援助職が最初に学習する事柄のひとつに「救世主願望」というものがあります。人を助けることや「ありがとう！」と感謝されることは人にとって大きな“快”のひとつであり、救世主願望とは、誰かを救う「救世主」になることを意識的・無意識的に志向してしまうことを指します。対人援助職者は自らのそのような欲望をまずは自覚し、意識的に抑制・解消していくことが必要となります。この猫ボランティアさんも、最初は本当に善意だけで猫を保護していたのでしょう。それが、いつしか自身の保護のキャパシティを超え、猫に適切な飼育環境を提供することができなくなっても、「受け入れて、感謝される」ことだけは止められなかったのではないかと想像します。

「ねこから目線。」では、その限界も把握したうえで、適切な環境が整っていない場合は捕獲を行わない、と決めておられます。ボランティアさんはあくまでも善意の人であり、専門職者ではありません。であればこそ、保護を受け入れる余地が本当にあるのかを確かめることは、結果的に猫を不適切な飼育環境の追いやることを防ぐものであり、善意の保護主が「救世主願望」のままに保護活動が続けることを予防することにもつながるのではないかと思います。

この「保護」の問題について、私自身は児童虐待で生じていることとの共通項があるように感じていました。小池さんも同じようなことを考えているのでは、と思って尋ねてみましたが、「そういえば、そうかもしれませんねー」とあっさりとしたお答えでした（笑）。

虐待の凄惨さだけが報道され、養育者に対する非難と早急な保護を求める世間は、保護された後の子どもの環境や、養育者の事情・経緯・思いには無頓着です。一方で、児童の保護のキャパシティが飽和していることや、どんなに思いはあっても人的・物的・経済的事情により保護した後に必ずしも十分な環境が準備できていない場合があることも、世間は薄々気がついているでしょう。「元の家よりはマシでしょう」という声もあるでしょう。この声は、猫の保護の現場で聞かれる声と相似形であるように思えます。様々な事情により、養育の状況が崩れてしまっている家族について、それでも発揮されている養育者としての力がうまく機能するように、時には介入し、時には見守り、伴走し続ける、という支援の可能性は、検討してみる価値があるように思いました。

「人もねこも一緒に支援」の起源

活動に同行させてもらい、「人とねこ」を「一緒に支援」することの意義を強く感じました。以前は、保護した場所に猫を手放すことができなかったと言う小池さん。どのようにして「人もねこの一緒に支援」にたどり着いたのかを聞いてみました。

小池さんが語られた内容は大きくわけて 2 つ。ひとつは育ったご家庭の要因。もう一つはその中での体験です。

小池さんのお母さんは、DV の被害を受けた女性の自立支援をされていたとのことで、緊急避難のため自宅に一泊保護して、その後、住宅確保や生活保護取得のサポート、フォローアップとしての家庭訪問などを行っていたそうです。「人ねこケア」の活動とも、ちょっと似ていますね。小池さんはこの家庭訪問に時々ついていっていたとのことで、そのご家庭に年の近い子どもがいたりすると、一緒に遊んだりもしていたそうです。ある時、動物を虐待する人に対して怒りを爆発させる小池さんに対して、お母さんは支援していたご家族のひとり、小池さんと年の近い女の子が、動物を虐待していたという事実を伝えます。この事実は、動物を虐待する人が極めて特異な、残忍な性質の人であるわけではなく、どんな人であれ、状況によっては同じことを起こしえるのだという現実を突きつけました。猫を救うためには人も助ける必要がある。あるいは、人を救うことが結果的に猫も救うことにつながる。この考えが生まれたことが「ひともねこも一緒に支援」の原点となっていたのだと思いました。

最後は捕獲！

そして訪問日の夕方、この日唯一の捕獲の仕事がありました。捕獲対象は2頭で、1頭



は以前この依頼主さんの依頼によって TNR をした猫。今回改めて保護飼育をするために捕獲したいということです。もう 1 頭は同じ餌場に姿を見せるようになったのら猫の TNR をするための捕獲です。一度は TNR をして、後になってやっぱり保護飼育したいというこのご希望。“よくあるんですか？”と尋ねてみると、比較的よくあるご依頼であるとのこと。続けて餌をあげているうちに、やっぱりウチで…という気持ちになったりするのかと、ぼんやり想像しながら、車から捕獲器をおろし、依頼主さんと合流します。

餌場の下見をしながら、普段の様子や猫の性格などを聞き取り、準備を進めていく小池さん。依

頼主の方は TNR 済みの子の保護に切実な思いがあるようで、「一度捕まえた子は、（簡単には）捕まえられないんですよ！？」と心配そうです。小池さんによると、捕獲機で捕まったことのある猫に対しては捕獲機での捕獲が成功する確率は 50%くらいで、慎重な子だとなお難しい、とのことでした。小池さんは、まずは 50%に賭けて捕獲機の設置を考えていた様子でしたが、依頼主さんの様子も見て、捕獲機にかかった猫にも使える「罠」を設置することにします。以下、TNR 済みの子を A ちゃん、TNR 目的の捕獲の子を B くん（性別はよく知りませんが雰囲気で…）と呼称します。



小池さんが罠や捕獲機をセットする間、心配そうに猫のことを私に話してくださる依頼主さん。A ちゃんは、兄弟猫（昔から一緒なので、たぶん、とのこと）と一緒に姿を見せていたのですが、最近になって兄弟猫の姿が消えてしまい、ひとりになってしまったようで、このことが保護に踏み切るきっかけになったようです。単に、情が移ったのかなあ、くらいしか考えられなかった自分の想像力の貧困さを恥じ入りました。

依頼主さんにはいつも通り餌やりの時間に登場してもらうために一度戻って待機して頂き、その間小池さんと私で捕獲機と罠の様子を遠くで見守ります。

そんな折、小池さんが道具を取りに戻ったほんのわずかな時間に、なんと B くんの方が姿を見せ、罠の中に設置された餌をパクパクと食べ始めました。罠のロープは私から 5m くらいのところにあり、それを引けば罠は作動するはずですが、その是非が判断できない私は物音を殺しながら足早に小池さんと呼びに車に向かいます。小池さんの判断は、スルー。優先的に捕獲する必要があるのは A ちゃんの方で、罠は B くんには使いません。そこで、先に B くんを捕獲機で捕まえ、後の A ちゃんの捕獲に専念できるようにする方針に決まります。ところが B くん、捕獲機の途中まではすんなり入ったのにあと一歩で出てしまったり、捕獲機の周りをうろうろしたりと、なかなか捕獲できません。



少し離れて、物陰から捕獲機と B くんの様子をのぞいてると、不謹慎かもしれませんが、ちょっと気分が高揚してきます。塀から顔を半分だして様子をうかがって…なんて、子どもの頃に街中でケイドロをしていた時以来かもしれません。小池さんに率直に伝えると、「楽しいですよ」とひと言。しかし、「捕まえられないと帰り道はひたすらどんよりですけど。」とも。そうですよね、お仕事ですもんね…とやっぱりお気楽な自分を戒めつつ、観察を続けます。すると、どこからか A ちゃんも姿を現しました。B くん、A ちゃんが同時に登場し、徐々に現場が混沌としてきました…。

再度、罠の方に餌をセットしますが、中に入るのは B くん。しっかり 2 食目も完食です。A ちゃんは罠の近くまでは来るものの、中には入ろうとしません。ここで小池さんはいつも餌をあげている依頼主さんと呼び、罠に誘導してもらうことにします。

電話をかけて 1 分もしないうちに、依頼主さんが到着。きっとスタンバイしてくださっていたのでしょう。依頼主さんの姿が見えると、A ちゃん是一目散に駆け寄っていきます。猫ってあんな風に人に懐いたりするんだ…と初めて目の当たりにしました。依頼主さんが罠の中に誘導していくと、A ちゃんはいつもと違う様子に少し戸惑いも見せながらもすんなりと中に入り、餌を食べ始めます。捕獲の時が近づいています。小池さんは、罠が作動したら覆いをかけるための布をもって来るように私に指示して、罠のロープを握ります。身を潜めその時を待っていると、ガチャン！！と罠の作動する音がして、私は布を持って走り出しました。A ちゃんは無事、捕獲されていました。罠から捕獲機に A ちゃんを移動させ、無事捕獲完了です。よかった！！

A ちゃんはこの後、のらねこさんの手術室に移動し、ノミダニの駆除や予防接種、ウィルスのチェックなどを経て、明日には依頼主さんのところに戻って来られるそうです。

依頼主さんは B くんも捕獲にも気持ちが残っていましたが、この日は既に 2 食完食していることや、A ちゃんの捕獲を行ったばかりの現場なので、再度姿を見せる可能性は低いと判断し、この日の捕獲は終了となりました。姿を見せなくなった A ちゃんの兄弟猫についても、死んでしまったのか、よからぬ人に捕獲されたのか…と最後まで心配しておられた依頼主さん。姿を消した猫の行方は、基本的にはわからないそうです。「ほかの餌場で過ごしていることもあります。誰かに保護されたか、他の餌場にいるか、確認は実際には難しいです。無事に元気であることを祈りましょう」と小池さん。こんな風に地域で見守られて日々を過ごしている猫たちがいるんだなあとしみじみ思いました。

訪問を通して

この日、A ちゃんをのらねこさんの手術室に送ったのが 19 時頃。この時間にも小池さんの携帯は何度も鳴り、まだ仕事は続く様子でした（結局この後さらに 2 件仕事をされたそうです…！）。1 日同行させて頂いたお礼を伝え、帰路につきました。

とても濃厚な時間と体験でしたが、これが「ねこから目線。」の日常なのだとも思いました。世の中には不条理なことがたくさんありますが、それで諦めたり腐ったりするのではなく、自分にできる一步を着実に重ねていけば拓けてくるものもあるのだということを実感しました。「ねこから目線。」の活動のキーワードはいくつかあると思っています、

1. 継続性

善意だけでは続かない。事業として継続できるように仕組みを設計する

2. 適切に機能する

自らの仕事の前後で生じていることにも目を配り、その中で適切に機能する。自分の領分はちゃんと果たしています、という責任回避をしない。

3. つながる

動物病院とつながる、過去の依頼主さんともつながる、自治体ともつながる、必要な時は警察や関係機関ともつながり、動かす。

4. 支援しすぎない、引き受け過ぎない

必要なだけのサポートはするけれど、基本的には飼い主、保護主に委ね、主体的な動きを支える。それが結果的に、パターンリズムに陥いることを防ぎ、人の力を引き出すことにつながっている。

の4点が特に重要なのかなと思いました。

「ねこから目線。」は、まさに地域支援として機能していて、さまざまな対人援助職に共通する、対人援助本来のあり方や姿勢が体现されているように思いました。これを個人事業でされているって、本当にすごいなあと感銘を受ける一方、自分自身も、もう少し自分の持ち場でできることを頑張ってみようと励まされました。

本当に貴重な機会を頂き、ありがとうございました！これからの「ねこから目線。」の活動も楽しみです！

(文：大谷多加志)